法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

ジュラ問題 : アイデンティティ研究序説(下)

加太, 宏邦 / KABUTO, Hirokuni

(出版者 / Publisher)
法政大学社会学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
Society and labour / 社会労働研究
(巻 / Volume)
37
(号 / Number)
3
(開始ページ / Start Page)
61
(終了ページ / End Page)
105
(発行年 / Year)
1990-12
(URL)
https://doi.org/10.15002/00003184

ジュラ問題　――アイデンティティ研究序説（下）

加太宏邦

はじめに
一　ジュラ地方
二　ジュラ州
三　「州」
四　地誌
五　ジュラ州創出
（以上『上』（三十六巻三号））
六　文学・証言
七　アイデンティティの円環――むすびに代えて――

六　文学・証言

前稿ではジュラ問題を平面と時間軸にそって可能な限り与件を提示しつつ一方で問題提起を行った。このプロブレ

マティックは次に集約されるだろう。

一　この分離運動の存在理由は外的要因だけからは解きほどけない。狭義の政治的・経済的・社会的文脈に焦点をあてたアプローチでは十分な説明体系を作れないだろう、という予感。ある側面の説明には有効としても、おそらく本質解明の有効性を持たないだろう。

二　むしろジュラ運動の動因とメカニズムをアイデンティティという人間的地平に置き直して考えてみる必要がないか。すなわち〝分離という意味〟の発生メカニズムを分析すること。ただ、ここでは、アイデンティティを定式化することを目的にするものではない。学説紹介、検討、比較あるいは種々の定義、類型論や用語規定などは本論の目的にも関心にも含まれない。

我々が思い描く〝アイデンティティ〟とは、たとえばエリクソンの用語のように精神分析ともパーソナル・ヒストリー的発達段階概念とも基本的な視点で、関係が薄い、とあえて言っておこう。あるいはフロイトの『自我論』などはその中で批判的に紹介されているトロッターなどの理論がヒントにはなるが、しかし本質的には、やはりほとんど重ならない。

本稿で扱う範囲では、ごく平板にならして言えば、人間が生きるのに依拠したがる（しなくてはいられない）・関係をもちたがる（一体化したがる）外的な「なにものか」（実体的であるのかそうでないのかを本論ではとくに問題とする）を指し、集団に関してのそれがそもそも本論の出発点になっていることもあって、むしろ、一番広くは〈エスニシティ〉概念と重なる。

この方面の研究、とくに文化人類学的アプローチは我々の関心と重なる部分が多い。一方、政治学や歴史学的関心からのエスニシティ研究は現象的分析にとどまることが多く（最近のケースで言えばソ連・東欧の民族問題）、いわ

ば〝自己アイデンティティ〟の意味発生点にまで遡られることはまずない。あたかもある民族がアプリオリに実体的に存在し、それが他の民族（あるいは他の集団）と軋轢を起こすかのごとくアプローチされているのがほとんどである。それはその領域の研究特性として当然なのであろうが、我々としてはたとえば、言語ひとつとっても、人間が言語を異にするという文化的な価値的側面、またその言語は即民族自決の請求の権利になりうるかという疑問など多くの問題が等閑に付される傾向が気になる。

本論では、あえて〝個人〟というフレームワークを出発点にして〝集団〟との接点、一体化などについて考究をすすめる。と同時に、クンシュタッターなどの静止的・分類的な理論とは異なって、我々としては、動因に常に直に遡る方法を採りたいと思う。

三　さらに、アイデンティティ創出の内的構造から「円環」というダイナミズムが確認できないか。

四　これらの問題を解くために、とくにジュラ問題にかかわった文学者たちがその作品でどのようなモノ・コトにまなざしを集め、そこから、どんなイメージをジュラに付与し、それがどのような経緯で〝ジュラ〟になっていくのかに着目してみる。作家にジュラのアイデンティティの考究のための測鉛を降ろす理由は、政治的プロパガンダや住民意識調査などの直接性から極力離れたかったからである。住民が実際の分離運動において、その態度を決めるという結果は見られるが、運動がすでに存在した・している以上、一切は逆転し、彼らのラディカルな意味での大義は隠蔽され、どのような言説にも我々が接することは不可能だからである。この意味でも、我々は、作家の発言の中で、ジュラ問題を直接に論じたようなものは出来うる限り排除するつもりである。

＊　＊

以上の点を念頭においてこの章では次の四人の作家・詩人を選び、作品や発言から彼らの〝ジュラ〟の分析を試み

てみよう。

ジャン・キュタ　Jean CUTTAT

アレクサンドル・ヴォワザール　Alexandre VOISARD

ロジェ=ルイ・ジュノ　Roger-Louis JUNOD

ユーグ・リシャール　Hughes RICHARD

これらの作家は今世紀におけるジュラ問題の発生から終結までに立ち会ったいわば〝ジュラ世代〟のある意味で代表である。彼ら以外に何人かの著述家がさらにいるが今回は補足の形でふれるにとどめる。[1]

ジャン・キュタ[2]

キュタはジュラ問題に積極的に係わった作家である。スイスから離郷していたが、（そして今はもうスイスには住んでいないが）ジュラ問題のために一時帰国をわざわざした。彼らジュラ出身の詩人を括って《ジュラ詩人》と一般に呼ぶが、キュタはフランス国籍を持つ今でもその呼び名を受け入れている。しかし、皮肉なことに、「ジュラに帰国していた間は、自分本来の詩作など一切出来なかったし、しようとも思わなかった」と述懐している。「すなわち闘争に明け暮れていた。当時、もちろん作品は書いている。しかしそれらはプロパガンダの消耗品と考えている。アラゴンの抵抗詩みたいなものだ」とも言う。もうすにし彼の言葉を聞こう。

「しかし、あの体験は実に貴重だった。アンガージュマンという意味で。政治と文化が一つの目的のために合体することはめったにないことだからだ。文化人と言われる人はすべてなんらかの形で参加できたからだ。この体験が自分の生涯の中で一番美しいものだと思っている。しかもこの戦いの先頭を切ったのが詩人だったことをほこりに思っ

ている[3]」

キュタはかなり単純明快に「ジュラは長らくベルンの植民地だった[4]」と認識し、形どおりのアンガージュマンをしてまた戻って行った。

彼は母親がフランス人であることもあり、またジュラでもフランスと国境を接するアジョワ地方出身であることもあって、歴とした〝フランス派[5]〟と言ってよいだろう。顔がフランスを向いていれば、ジュラ問題の図式は〝仏語文化対独語文化〟という側面も根底にはあるだろう。一九四二年に彼が創設に参画した《Portes de France》（フランスへの門[6]）という出版社の名前がそのことを象徴的に語っている。同じ事は、彼の第二次大戦中の《Mal au Coeur》（『吐き気』）という詩集のタイトルにもよく表れている。というのは、彼は中立国スイスの市民としてナチ占領下のフランスを「痛ましく感じ」（mal au coeur の別義）、あたかも自らの文化への屈辱的仕打ちととってこの歌を作ったのだ。

その出発点からいまでも彼は自分をアラゴンやヴァレリの系譜に位置付けている。言うまでもなく政治的な意味でアラゴンに、詩作の技法と精神においてヴァレリにである。自由あるいは独立というタームでジュラと結び付き、精神的〝地縁[7]〟としては実は希薄なはずの彼は、そうなると、ブルターニュの独立でもよかったのではないかという疑問が生じるが、今回のテーマからは離れるのでここでは掘下げない。

これらいずれにも見られるキュタの二面の使い分けはなにかいかがわしいものを感じさせる。しかし、この二面性とはたんに、同一平面上の二項の比較の問題ではない。時間の軸においての二つの契機の問題なのである。すなわち、キュタにとってジュラは、ジュラ問題によってはじめて触発されて生まれた。ジュラが示差的に提示されてはじめてジュラが、いささか外面的ではあるが、彼のものになったということである。逆ではない。それは、占領下のフラン

スがドイツとの関係で示差的に浮き上がってはじめて母なるフランスを摑んだ彼の青春時代と相似の反応だと言ってよい。『吐き気』の一節を見てみよう。

ぼくから去ったものは悲しく重い。
ぼくに残っているものには祖国がぬけおちてる。
かの地の、どこか雨の下では、
情火に情のなく
調べも見あたらない
こころの小鳥たちがだまっている。
あゝぼくの情人、きみはいづこに。
きみの心の祈りがぼくにはもう聴こえない。
おそらくは、わがいのちのきみよ
きみは歌声の絶えた鳥籠でしかないのだ。(8)

この詩編の巧拙は別にして、この一節で「祖国」(patrie)が示差的に立ち現れることがよくわかる。ここには喪失についての哀惜の念が歌われるがその喪失感は奪回願望を(絶望的にだが)内に秘めている。このようにして空虚が「祖国」を惹起するというプロセスはわれわれのかんがえるアイデンティティの本質をいささかでも説明しないだろうか。

彼の詩作品に直接〝ジュラ〟が現れるのは一九六〇年以降のことである。とくに帰国中の一九六六年から一九七二

年に頻出する。その中でも「一九七四年の待降節の第一日」に出版された《Noël d'Ajoie》（『アジョワの降誕祭』）[9]はきわめてジュラに密着した詩である。そのために我々はその一三七聯に及ぶ四行詩（一五節に分れる）の中から、直截的であるきらいがないわけではないが、ともあれキュタの〝ジュラ〟を抽出することができる。

キュタは母の危篤の報にパリからふるさとのポラントリュイに駆け付ける。

母の臨終からこの詩は始まる。母の喪失は母の存在の確認となり、それは母にとどまらず母なるものへの覚醒につながるだろう。すなわち〈郷土〉である。それらは後に見る。まず第一聯、第二聯と最終聯を見てみよう。

かあさんが行ってしまいそうだ
表徴からわかる、
ぼくを降誕祭に呼び戻した
その行間から読める。

あゝ、かあさん、行ってしまうんだね。
かあさんが行ってしまう。
この土地から
死者の土地へ。[10]

かあさん、雪が降っている。
最後の降誕祭だね。
かあさん、空を見てごらん、

モンジョワ様だよ。[11]

母が去ろうとして初めて「この土地」が詩人の土地になる契機がここに見られる。[12]

「雪」はジュラの風土的象徴である。「降誕祭」はカトリックのジュラの時間的象徴であり、それと同時に、この詩のタイトルとなっていて、救世主すなわちジュラの解放の担い手の降誕を意味する。「死者の土地」は上にある。母に「空を見て」と叫び掛けながら、自分も新しい「土地」を渇望する。それは上位の土地、すなわち新生ジュラ州である。

「モンジョワ様」Montjoieというのは、中世仏語で、〝境界石〟であり〝国の守護〟である。そして、このことばを叫びながら中世の兵士たちは戦ったという。母の死と差し違えるように掲げられるこの強烈なイメージは、〝母なるもの〟の一切の絶対至上権の宣言ととれる。

さらに「モンジョワ様」は〈アジョワ地方〉と〈ジョワ〉（喜び）との暗黙の懸け言葉になっていることは言うまでもない。

このように「この土地」は母の死と引き換えの空隙を埋め合わせるように自己のアイデンティティの再確認作業へと赴かせる。

三節目では詩人は、アジョワ地方の土地の名前を列挙していく（この節のみヴィルギュルで鎖状につらなる一二聯）。ジュラのだれにとってもこの上なくなつかしく響く土地の名前[13]（「ぼくたちの村々の名前」）を大道芸人の口上よろしく述べ立てる。しかも、他者にとってはまったく意味・喚起力を持たない固有名詞が、いわばこれ見よがしに立て板に水と流れ出す。〈ダンヴァン〉〈ブレソクール〉〈シャルモワイユ〉〈バロシュ〉〈ボンフォル〉など、よほど

詳しい地図でも見ないかぎり見付けられない、人口数百人程度のあるいはそれ以下の村の名前がそれぞれ意味深く歌われるのである。

さらに、ポラントリュイの町においてはこの地名列挙は細分化され、通りの名や建物、酒場の名にまでおよぶ。〈ポルト・ド・フランス〉〈アノンシアード〉〈トゥール・ド・コック〉などの固有名詞は土地の人に直接聞くか詳細なガイドブックでも繙かなければ分からない。ましてや、〈ポム・ドール〉とか〈ドゥ・クレ〉などのビストロ（らしい名前）はさらに一身専属的喚起性しか持っていない。

地名はここではトーテムであり、個別化と排他性の機能をもつ。このことによって差異は尖鋭化し、集団のアイデンティティは強烈になる。

マニアックなまで詩人がこだわるこの紐帯としての「固有名詞」によるアイデンティティ確認は第九節目の八、九聯目でもみられる。

丘の名前、野原の名前
山の名前、大地の名前
石の下の顔々の名前よ、
地名よ、さ迷える村よ、

ハートの形をしたその堅琴を見付け
それを手にするとき、
幸せへの渇望がふるえだす

風の中の刈り入れみたいに。[14]

五節目では歴史の軸を巡っての詩編が並ぶ。空間のアイデンティティに加えて時間の共有財産が一覧表になる。父が生き、隣人が生き祖先が生きた共通の時間（歴史）が確認される。しかしこの共有財産としてのクロノロジカルな軸はあまりにも、ステレオタイプである。たとえばその八聯目、九聯目は、ベルン「併合」後のジュラである。

あれから警察がやって来た。
教会の中から追い払われて
ぼくたちは納屋の中で、
ミサや聖体秘跡をした。

ぼくたちは押し付けられた、
代官を、杭の上の帽子を、
騎兵を、お巡りを、
ドイツ野郎を、ゲスラーを、ピピを。[15][16]

これらはいかにも直截で、テル伝説のアナロジーなどいかにも安直であるため、われわれの分析の関心からはずれる。この手のアジテーションは「一世紀半の不幸」[17]「ジュラはベルンのごみ箱になった」[18]「（ジュラは）籠の中の鳥」[19]「アジョワ、汝を愛す」[20]「雪が降るそしてぼくの大地は熱い」[21]「ぼくたちの夜を解き放つ騎馬団」[22]などにも見られるが、

すでにこれは詩人のジュラではなく政治家のジュラである。

次に、そう頻繁ではないがこの詩には方言の使用が見られることの意味を考えてみたい。たとえば《rai-tiai-tiai》[23]はヴァルゼルの説明[24]によれば「謝肉祭の躁宴」のことらしいが、『アジョワ方言辞典』や『スイス・ロマンド方言辞典』[25]にすら載っていない。

ここでの方言は言うまでもなく内部結束を固め、自らを意図的に有徴にする働きが与えられている。この詩を読むことは秘密結社のイニシエーションにも似て、自己の高揚と同時に他者を選別的に見分ける手立てとして使用されるだろう。

果てしなく進むアイデンティティの親密化はやがて詩人の身辺に降りてくる。一三節には、自分の家が「一五一六年」に建てられたものであること、「妹」「弟」の身の上、名前、「父」の職業「母」の家事までが歌われる。さらに、家のそとを「マンドゥレール先生」「テレーズ」「エルサ」「マドレーヌ」「マルグリート」が「通る、また通る」と歌う。[26]

ここに描かれる彼の身内と手に触れられるあまりにも具体的な人々は「彼ら」にのみ了解可能な世界である。もちろん、我々の世界には本質的にそういう形でしかモノは存在しないにもかかわらず、外部の我々にある種の不安感を引き起こさせる。それはおそらくそこにこれ見よがしに顔をだしている彼ら同士の馴れ馴れしさ、つまりよそもの排除の構造である。言い換えれば、リアルな個別性を装いながらその小宇宙を普遍化しようとする意図、あるいは、「彼」の真実が真実のすべてと言う構造である。

キュタの青年時代には彼の中でジュラは未だ差異化されていない、たんなるいち地域であったはずである。『アジョワの降誕祭』以前の詩がいわば無国籍あるいは非スイスであることからも明らかである。彼の〝ジュラ〟が母の死

を契機に天啓のようにどこからか飛来するというのは、たいへん詩的ではあるが、にわかに信じ難い。と言っても、また潜在的に存在していたジュラへの愛着が顕現化したと言うわけでもない。そうでなくなんらかのかたちで人間が持つアイデンティティへの欲動がジュラを事後的に発見させたというべきであろう。

したがって、キュタにとってのジュラ問題の特質は、すでに構造化されたイデオロギーから遡って発見した《差異》にある。そしてその契機が母の死であることもこの詩から確認できた。

ただ、『アジョワの降誕祭』には分離すべきジュラというアジテーションがあまりにも強く前面に出ているきらいはあるにしても、この詩人と詩がジュラ分離運動の高揚にはたした役割の大きさを考えてみるときに、やはり我々はアイデンティティが円環するというダイナミズムを認めないわけにはいかないだろう。実際、この詩はカフェ、大衆の前、祭りの現場で熱烈に朗読された。いわば詩人の天才が使用した道具立てがアイデンティティの内的構造の潜在的な喚起力を持っていたからこそひとびとがジュラ=アイデンティティの再確認をし、そのことが運動に拍車をかけたのである。

以上見たように、キュタに見る〝アイデンティティ〟は母という契機にはじまり固有名詞の徹底にあった。固有名詞は〈アンチミテ〉intimité（〝内側〟〝結束〟）として機能し、場合によっては外側の排除を行う強力な武器である。これに外側は〝正当に〟抗う術をしらない。唯一の対抗手段は自分達も〈アンチミテ〉で防衛することである。その理念的行く末については後に少し考えてみたい。

アレクサンドル・ヴォワザール[27]

ヴォワザールはジュラ問題でもっとも有名になった詩人である。その作品は分離運動の間、集会があるたびに人々

によって熱い思いを込めて朗読された。

その詩はシュールレアリスムとフランス抵抗詩の系譜にあるものでその意味では先のキュタの後輩といえるが、その先輩と異なり、ヴォワザールは根っからのジュラシヤンであり、アジョワ地方を身体で表現するような熱をもっている。したがって、彼の場合、以下に見る〝アイデンティティ〟確立のため、分離運動はかなり切実な必然であった。

彼の詩作品はジュラ分離運動においてしばしば政治的プロパガンダとして掲げられ、そのことにヴォワザール自身も抵抗はしなかったが彼は「詩というのはいつもなにかのメッセージが内包されていると思うが、ぼくはそれを表だって述べることを目的としない」「人々はぼくの詩を政治的に読んだがぼくは自己を語った」「政治が主人公でなくぼくが主人公の詩である」[28]とはっきり語っている。

ヴォワザールをジュラ分離に関係させてもっとも有名にした作品が『夜明けの自由』[29]である。この詩集は一九六七年、運動の高揚期に発表されジュラの人々に熱狂的に読まれた。この長詩は〈痛みの国の歌〉Chant du pays de peine、〈夜鍋の哀歌〉Complainte à la veillée、〈死にたくない国によせるオード〉Ode au pays qui ne veut pas mourir、〈不朽の沖積層〉Les alluvions incorruptibles の四篇に分かれているが、直喩をほとんどもたないという意味で、引用がむつかしい。第一篇の第一聯を例にあげよう。

おゝ受難と麦の切り株の国よ、
おまえの道々の容赦ない埃の中に、
くたびれた樫の木々の葉陰に、
言い伝えを読むことをぼくは学んだ。[30]

この第一聯の喚起力は、そこに象徴的に語られる「国」、言うまでもなくジュラという郷土に由来する。そしてこの詩のなにより特徴的な点は「ぼく」が濃密にその国に重なっていく自己史だということにある。ヴォワザールの詩ではメタフォールを多用した極めて抑制のきいた象徴的〝ジュラ〟が描かれる。しかしその暗喩世界をトータルに支配している「なにか」があってこれがおそらくジュラの人々にたいしてアルゴのごとくいわば内輪の言語として媒介を要せず伝播するのだろう。そのことを感じるだけでわれわれはすでに他者として選別される。

ここにヴォワザールの隠喩の二重性のたくみな利用の戦術がある。つまり可能性の世界の拡大、あらたなイメージの創造性という本来の機能に加えて、実は隠喩に見えてヴォワザールの世界共有者にとってほとんど直接表現でもあるという意味での二重性である。

ヴォワザールの内面世界がジュラと合わせ鏡のようなものだとすれば、彼が自己に密接すればするほど、自己に沈潜すればするほど、そのジュラへの想い（愛情だけでなく痛恨も、こし方の一切）という〝普遍的ジュラ〟は、ジュラの読者の目に際立って映るという不可思議な仕掛けがここにはある。しかし、では一体どんなジュラに、どのように同一化しているのか。

たとえば第二聯目を見てみよう。

夜の葉むらを通して
ぼくはただ手を差し延べるだけでいいのだ
なん世代もなん世代にもわたって忘れられた母たちの

こわい髪の毛に触るためには。

「母」はキュタにも見られた通り、ある人々には不可避的に大地と結び付く、通俗と詩的昇華とのあやうい隠喩であり、その母が「忘れられ」「こわい髪の毛」をしている。それは当然〝痛ましさ〟の感情を引き起こすだろう。その母を救う「手を差し延べる」のが「ぼく」の義務でなくてなんであろう。そのぼくは「夜の葉むら」のむこう側にいる。ジュラの深い暗い森のイメージ。

この中にある「葉むら」「夜」「こわい髪の毛」「忘れられた母たち」などのことばは単純な意味でジュラにかならずしも直結しない。しかしそれらは単独でなく網の目状に関係付けられると、実は露骨なまでの、あのジュラに確実に構成される。そこへ「ぼく」がいま参入しようとしている。

このように、いま、たとえばいくつかの聯をかりに取り出しそのテクスト中に配置されている次のような「語」を見るとき、必ずしも直截にジュラを語らない語がその詩編の構成にあっては、ジュラの人々の胸に訴えるたいへんな起爆性をもつイメージとなりうることを理解するだろう。

「雪の重荷」「耕作」「粘土」「ライ麦」「堆積山」「山腹」「水」「速歩の風」「畝」「背斜谷」「桜草」「乳」「雌羊」「雄羊」「岩の頂き」「山びこ」「泉」「洞穴」「孤立した小村」「納屋」「夜の凍った曲がり道」「切り立った崖」「森々」「谷々」「野原」「（ぼくたちの知識を洗濯する）雨」「（差押を消しにする）冬」「蝮」「脈石」「深淵」「樫の木」「水源」「リス」「キジ」「フウリン草」「エリカ」「山々」「牧草」「藁ぶき小屋」「川たち」「星々」「ツグミ」「小枝」[31]

言うまでもないことだが、これらの語はジュラの人々にはさらに血肉化したコノテーションを持つはずである。たとえば、「背斜谷」combeは我々には辞書面で知る限りでは、地質学上の術語以上のものではない。しかし土地の人々はもちろん〝彼らの〟「谷」とか「窪地」の意味で使用している語である。

そしてこれらの「語」をさらに全編にわたって集積していくときそこに喚起されるジュラはとてつもなく深く大きな〝意味〟に変容していくだろう。たんなる〝名〟でしかなかったものが詩人のこれらの予言者的ことばによってアイデンティティを喚起する〝意味〟へと変身する。

こういう意味付けは恣意的ととられるかも知れない。しかしヴォワザールの詩全体が「詩」の世界から析出される差異としての意味は、あきらかに〝ジュラ〟を指向している。もちろんそういう作業が〝明証的〟にできるわけではないが詩が〝正しく〟読まれるとはそういうことを意味している。譬えて言えばイヴ・ボンヌフォワのいかなる詩の一篇もジュラの風景に置けば光輝ある根無し草になるだろう、ということである。[32]

ヴォワザールほど手がこんでないもうすこし単純なジュラの風景をひとつ挙げておこう。ピエール・シャピュイ[33]の二重の意味で「視覚的」な詩である。情景クロッキーという意味でと、語と行の絵画的配置という意味でである。たいへん少ない、しかもありふれた語彙でまごうことなき〝ジュラ〟の冬景色を的確に表現している。

道　　森
白　　白
に染まった
また

さて、ヴォワザールに戻る。その第二二聯目は「痛み国の歌」全四三聯のうちのほぼ半ばにありちょうど頂上を形づくっている。その中に「ぼくは〈自由〉と言った　そしてこの国は／蘇生することばの栽培に適している腐植土へと、大地へと生まれ変わるだろう」とある。ここにある生々しいまでに具体的な「土地」と「自由」という〝ことば〟の共生関係がまさにヴォワザールのジュラである。すなわちことばの生命を栽培する行為を内包したジュラである。この時点で、ジュラは神が粘土に息を吹き込むことでアダムを誕生させたように、ヴォワザールによって〝創造〟されたのである。

次に、ヴォワザールが「母」のイメージをどのようにジュラに重ねあわせているのかを確認しておきたい。

初めに引用した部分に見られるように、いわば痛ましい「母」が提示されるが、次の聯では、それでも希望の対象なのだという認識が示される。

かくも深い母たちの目は
まだ輝きを失っていない
歳月の通りすぎた
屋根のちいさな窓で。[35]

研白[34]　静寂

さらに、最も「母」が前面に出るのは〈夜鍋の哀歌〉[36]である。この四聯詩は子供が夜鍋仕事をする母に質問をする形で構成されている。

「手引き紐」をどんな針で縫ったの？と訊く子供に母親が「何年もかけて切り株を突き刺した、ピカピカ光る（農業用）フォークだったことを憶えているよ」と答える。「手引き紐」（歩き始めた幼児に着けて大人が握って歩かせる紐）lisièreという語はその他に「森と畑の境界」の意味がある。子供（子孫たち）を導く道具＝畑の境界＝森や荒れ地を営々と開拓した農具＝母の記憶という連鎖がジュラへのアイデンティティを引き出す。

「おかあさん、教えて、あんなにやさしい歌声がもう壁の亀裂のなかでふるえているのを聴けないのはなぜ？」という子供に母親は、恐れ山から降りてくる、麦の穂先の涙の露を陶酔させる、風を聴いてごらん、と答える。とだえたジュラの歌と、人知れず涙をながしてきたつつましい人を、今こそ、陶酔に導く新しい歌、というアイデンティティのルネッサンス。

「おかあさん、教えて、どうやってたそがれを越えてぼくたちのところまでそんなにもたくさんの燠が燃え続けてきたの」「かあさんの胸にもたれてごらん、かあさんのかあさんの苦悩が遠くで鼓動しているのがきこえるだろう」という母の答え。燠＝たそがれがジュラのかそけきアイデンティティの伝承物語の創造でありこれをパラフレーズするように母親は「身体」で子供にいのちの継承を教え込むのである。

「おかあさん、教えて、どんな戦慄のためにそんなに大きく目を見開いているの」と問われて母親は「草のざわざわという音に重なる馬の疾駆と息子のひたいの下の年来の熱のため」と言う。いよいよジュラが動き出す、その熱狂に耐えに耐えてきた母親は身ぶるいを始める。ジュラの始動である。

この四聯にみられるヴァワザールのジュラは母を語り手にしつつ、その母はジュラそのものである。彼の母を語る

口調は特別である。たとえば、別の詩で彼はこう歌う。「ぼくは母の国 pays maternel に住んでいる。ぼくはそこに生き、眠り、食べ、動く。ちょうど母の腹にいるように」、「ぼくの歴史〔物語〕はぼくの国とぼくの母とともにはじまる」、「ぼくの国はぼくの母だ。ぼくの母の腹は十分に広く〔……〕その宇宙に感謝の念をいだくものである」、「母=国 Le pays-mère は大地と水の二重の象徴によって出来ている」[37]などなど。

さらに、そのその母は、主体であり客体でもあり始める。すなわち、母の思い出はジュラの歴史で、母の希望はジュラの未来で……という自己言及の形をとりだすのである。ヴォワザールはさらにこう歌う。

ぼくは母の国の内側にいて外側にいる〔……〕ぼくは自分の目でぼくであるこの国を見る。そして国はぼくを見る……[38]

このように、見る人と見られる人とが一体化する、という意味の自己言及が可能なのは超越者だけである。その超越者は「母」でもあり「国」でもあり「ぼく」でもある。なぜならいま一切がここに同一化するという確認をうけたのだから。

ここにアイデンティティの本質的な姿がみられはしないか。客観の偽装をして最も客観を排除したところにこそアイデンティティの発生と存在はある。

ぼくの国とぼくとの間には、歳月といえど破ることも明らかにすることも出来ないはっきりしない紐帯がある[39]」（傍点引用者）

アイデンティティを欲すること。しかし無からは生じないアイデンティティをだれかが、「おまえのアイデンティティはこれこれだ」と神託あるいは天啓のような効果あらしめる形で告げる。息子を主体にすれば、それは「母」以外にはないだろう。それも、いまこそ立ち上がれと言わんばかりに息子を鼓舞する形で登場する。これは、神から「神の嘉したもうこの王国から英国人を追い払え」というお告げを受けたジャンヌ・ダルク劇とよく似ている。「英国人」を「ベルン人」に替えるだけでよい。実際、フランス人が自分をフランス人だと初めて自己認識したのは、クルツィウスも指摘している通り、百年戦争中のこの事件を境にしてだろう。[40]

ここで、ついでに指摘しておきたいのは、その「母」であれあるいは神であれ、それはある集団、民族に〝えこひいき〟（身内擁護）をする都合のよいものとして、そうとは自覚されず、登場する点である。ここにアイデンティティの偽装せる普遍性という問題が生じる。このことはあとでふれる。

こうして確認されたジュラは、いまや〈死にたくない国によせるオード〉の最終聯であからさまに語られる。この六聯の頌歌はまさにギリシャの凱歌だ。初めの二聯では一四行の各行にほぼ一回ずつ「ぼくの国よ」という語が出てくる。周到な手続きののちジュラが「誰のもの」であるかが宣言され、最終聯では「時は来たれり」とアジテーションに入る。もちろんここから先はこの章の探究の対象ではない。

ただ、この聯で「ぼくの粘土の国よ」に引き続き「ぼくの、復活しつつある自由よ、ぼくの蘇る自由よ」[41]という句があることには注目しておきたい。ここに「ぼく」の所有するものが国＝自己というアイデンティティの決定的な姿を見るからである。

以上見たように、ヴォワザールのアイデンティティはちりばめられた語の網の目が作り出す意味世界と母性との両者で創出されていることをわれわれは確認した。そしてとくに国と母についての認識は二重の意義をヴォワザールに

与えていることもついでに確認しておきたい。それは「この両者〔ぼくの国とぼくの母〕は終極的にぼくのことばの中で統一を得る」[42]（傍点引用者）という句にみられる、ジュラにアイデンティティを見出すためにはことば（詩）にアイデンティティを抱くという二段構造でありその行為の主体はしかも「ぼく」であるということである。

ロジェ=ルイ・ジュノ[43]

ジュノはアンガジェ作家であり、ジュラ問題とは別に、スイスの中産階級的、偽善的社会に手厳しい批判をしてきた。このため、彼においては、どちらかというと、作品=アイデンティティの深まりという出発点をもたず、直接に分離支持論の政治的・社会的発言が先行するかたちになっている。

しかし、そうは言っても、やはり彼の作品のなかにもジュラは遍在して息づいている。たとえば、小説『眩しい物陰』[44]では実は、舞台がヌシャテルでありながら、あきらかに冬のジュラの風景をおもわせる叙景が至る所に見出されるのである。[45]我々はいまここでは、彼が一九五〇年代に発表した散文詩『果樹園』と『館』の一節から彼の〝ジュラ〟を見てみよう。[46]

夜になる、駆け足だ。犬が吠えた、乳処理場へ百姓の一番荷車が帰って来たのだ。肌を刺すような霧っぽい空気のなかにふいに雪の匂いが漂う。だれかが大声で独り言を言う。今夜は凍るんじゃねえか。最後のグラジオラスを切っておくとしよう。[47]

染み入るような匂いの霧の季節だ。夜中には物音がしない季節の到来。その寂しさの中で子供時代の恐怖がまたやって来そうだ。枯れ枝の林の中をけものがうろうろし、川岸の砂利の上で爪と牙で吠えたり喧嘩をする。岸の向こうの森には女の声

をしたフクロウが棲んでいる。風の夜。[48]

ジュノの故郷感覚は郷愁とか少年時代の記憶のセンチメンタリズムである。しかし、彼がこれこそ自分にとって血肉化した感懐だと言えば、それは絶対性を帯びてこよう。彼は、今日ほとんど忘れられた郷土のある作家[49]の作品を引き合いに出してこう言っている。「ぼくにとってこの小説にはなにか魔術的なものがある。それはぼくが生活したのと同じ場所のイメージに巡り合うからだ。そこに描かれている村はぼくの両親の村コルジェモン以外のなにものでもない〔……〕」[50] この「魔術的」な感覚は絶対的である。すなわち他者のコメントを無効にする力を持つ、血肉化した〝風土〟と〝自己〟というテーマだからである。

ジュノのエッセーのひとつに『ビエンヌとラ・ショ=ド=フォンの間で』[51]というのがある。ジュラ問題が扱われている興味深い作品である（ただ、あまりに直接的なので我々の分析資料にはしなかったが）。

この中にベルン人と「わたし」（ジュラ人）が列車の中で対話する場面がある。列車はちょうどラ・シューズ川にさしかかる。すると、「わたし」は、「この川はベルンの川じゃない」とつぶやく。あいては「分離主義ってそう言うことが闘いの大義になるんですか」[52]と聞き返す。このやりとりはさきの風景の問題に係わって、アイデンティティの問題を象徴的に表している。ある風物が固有名詞を与えられ個別化し、示差的に〝意味〟を帯び、そのことに意義を認める者と、たんなる匿名的風景としてしか目に映らない者の共通理解の不可能性である。

ジュノのジュラはどこからが「彼の」ジュラでどこからが分離運動のジュラか境界が不明である。けれど一般にどんなジュラ人についても、ジュラが問題として意識された時点からは、この両者は弁別しがたくなる。アイデンティティがおそらく円環するだろう、というアイデアのひとつはこの疑問にも発している。

この意味で、ジュノなども編集に参画した『ジュラ・アンソロジー』[53]が果たした役割はジュラ人のジュラを分離運動のジュラによって隠蔽してしまった最も大きな作為だと言えよう。

この『ジュラ・アンソロジー』がヴァルゼル[54]を編集責任者に戴き、出版されたのは一九六四年のことであるが、この大部の二巻本はジュラを、文字文化的に統合したもので、そこには文学作品だけでなく神学、政治学、ジャーナリズム、歴史、哲学、科学、経済論などおよそ文字による文化のすべてが網羅された。この網羅という精神は、ベルンを排除しながら、ラウフェンのドイツ語作品は編み入れるという徹底ぶりにも露骨に見える。編集によって集大成という体系が出来るためには〝体系〟の自覚がなくてはならず、ここでも明確なのは、実体的にジュラが存在していたのでなく、示差的に〝ジュラ〟という構造を創出したということである。

ユーグ・リシャール[55]

リシャールは「南」の貧しい農家の出身で、その愛郷のかたちは、詩集『ここ』[56]や、次の『陽節』[57]の一節によく現れている。

あの春は、今もぼくの体内に鮮やかな血をめぐらしている
ジュラの森々はぼくの知る限り一等美しい
実に、人になつかず、深く
よく降る雨のせいで
足跡も残さず、

〔……〕
曙が縦の間を騒がしくわたり、
そして後ろには
影が足を引きずっていた
きらめくひとかたまりの星宵が
村を覆った
昔日の雪
そしてぼくの子供時代
朝が古い灯火を吹き消した
あの登り来る春に
突きあげられて
ぼくはまっすぐ山頂へ歩いた[58]

この風景はまごうことなきジュラである。そのジュラを「一等美しい」というリシャールという詩人はそのときジュラに深く魅入られている。「ぼくがどこにいようとも、どこに行こうとも、ジュラはぼくの中に棲みついている[59]」のである。

しかし、彼の選び取った生き方となると、この契機が逆に働く。というのは、次に彼は、「それはそうだが、ぼくはもうジュラには棲まない〔……〕とくにジュラ問題が起こってからはこのことについてぼくは沈黙をしている。〔……〕なにか喋ってはいけないような気がしている。もし喋るようなことがあると、ぼくの存在に一番使いたいと思っている大義を犠牲にしてしまうおそれがあるようなかんじがしたからだ[60]」と言っているからである。そしてさら

に、「〔……〕ぼくの《内部のよそもの》というかんじはなんとも説明し難い居心地の悪さを分泌する。それは、故郷の高原を歩いているときも、近隣の地域を歩いているときもぼくにつきまとっているのに気が付く」[61]それはどう払い退けようとしてもかれから消え去らないと言う。

「何日かしてぼくはあらん限りの力と情熱でこの地を嫌悪してやった。それはこの地が気紛れにぼくたちを支配下に置くからだ、〈歴史〉なんて物が勝手に区分けした地域だからだ、破廉恥に骨の髄までぼくたちのエネルギーを吸い取るからだ、ぼくたちからやさしさを、笑いを奪い取るからだ、果てしない世界や、山の向こうの別の世界や、べつのぼくたちが存在することをぼくたちに忘れさせてしまうからだ」[62]

つまり、リシャールのいう「大義」とは他の分離主義者と逆に〝外〟なのだ。我々の興味をひく点は、キュタやヴォワザールの抱く同じ郷土がリシャールにおいてはアルビヴァレンツな存在になる、という転換のしかたである。しかも、リシャールは愛郷というアイデンティティは窮屈な「自己」を強制しないか、もうひとつの自由、すなわちアイデンティティからの逃走の自由の否定にならないかという批判をも惹起している。言い換えれば、民族抑圧（があったとして）から自由になる自由は民族から自由になる自由と共存できない、という問題をはらむ。

とは言え、彼は、彼の愛するヌシャテル州出身の詩人サンドラールと異なり、故郷というアイデンティティとの対決に苦しんだことも確かである。

「《ここ（ジュラ）で幸福でいるためには、ここにあるものを称揚するだけで十分だ》とピエール＝オリヴィエ・ヴァルゼルは故郷のアジョワ地方を紹介しがてらどこかでそうもらしている。〔……〕。なにを称揚するかって？　彼は、恐ろし山（モン・テリブル）、アレーヌ川、ビュール高原やファイ高原、リュセル湖を次々と挙げている。彼は自分の故郷にいると、まるで〔……〕降誕祭前の雪みたいに心安らかなのだ。雪は翌年の豊作の守り神でもあるし。ぼく

は、こんなに自然なまでにこだわりなく心から自分の故郷と関係を持てる彼がうらやましい。[63]」というリシャールはヴァルゼルやその他の分離主義者とまったく同じ故郷を同じなつかしさで触れていながら、「幸福」という一点でそうなれなくて彼らを「うらやましい」と告白している。

同じ風景、歴史がいかに恣意的に使用されているか、本当に「分離運動」の必然はあったのか。ただやっかいなのは、アイデンティティが何らかの社会的意図で一旦唱えられると、それはいつのまにか実体的な存在になり、〝実際に〟問題を引き起こす、ということである。

問題が引き起こらないほうの例にはこのリシャールのほかにヴィルジル・ローセル[64]の例があげられる。ローセルはジュラを初めて自覚的に取り扱った碩学である。その守備範囲は専門の法学から文学、歴史、創作におよびその多くがスイス・ロマンド、とりわけジュラを中心に据えている。我々は、彼のジュラへの思いのたけを表白した数多くの詩を知っている。それらは今日、詩と呼ぶにはあまりにも稚拙ではあるが、その素朴な思いは十分理解できる。

「ぼくのジュラ」

草の陰にも隠れてしまうぼくのちいさな故郷
そこには自慢できる高峯も、大都会もないけれど、
ひとは鼻先で笑うけれど、
ぼくはジュラを愛す、ぼくは心の目でジュラが見える。[65]

ぼくはジュラを愛す。祈るように愛す。
だから、どのようにとかなぜとか聞かないでくれたまえ

ぼくの愛するささやかなこの故郷、ぼくの祖国
最期の息をひきとるまでこの国はぼくにとってすべてなのだ。[66]

ローセルは確かにジュラの自覚的「発見者」だった。この詩は分離主義者によって歌われれば、反ベルンの大義となり得たかも知れないほどの〝絶対性〟を持っている。しかし彼はこれらの愛郷詩だけでなく、その膨大な愛郷的著書[67]のどこでも、ジュラの分離について、あるいはベルンに対する敵対を意味付けるように語ったことはない。ベルンのジュラに対する政治的・社会的「支配」は彼の時代のほうがより大きかったにもかかわらず、である。その理由は、ローセルが、ジュラをスイスに、スイスを汎フランス語文化圏にひいては汎ヨーロッパ文化圏へ組み込みたいという、一九世紀の知識人らしいおおらかな理想をもっていたからである。[68]

ジュラの始めての自覚的詩人はヴェルネル・ランフェール[69]と言われるが、かれは長いパリ滞在の後、結局帰郷することになる。しかし、帰って来たものの、懐かしいはずのジュラはまるで死んだようなたんなる田舎だった。「ぼくのふるさとのジュラ。人も物も平穏、秩序、静寂、安定。そのすべてがぼくにとてつもない冗談としか思えなかった」。[70]そのまるで「無人島のような」ジュラでの灰色の絶望的な生活を過ごすなかである日、ふとしたことで、ティボデーの「スイスの中の一切が我々に見落とされている」という一文がランフェールの目に止まる。この言葉に雷に撃たれたように触発されてランフェールは郷土の再発見を始める。日常の凡庸さを変容させるその苦しい作業を通じて彼は「一切の出来事は内にこそある」[71]という結論に達する。

郷土と詩人という問題は、日本でも、近代詩人たちの多くが味わった大問題でもあった。啄木、藤村あるいは朔太郎などの人口に膾炙している作品の多くは「ふるさとは遠きにありて思ふもの」と歌った犀星を引くまでもなく、何

らかの意味で故郷に対するアンビヴァレントな感情を歌ったものだ。しかしランフェールはそれを故郷の側へ沈潜することで解決しようとした点で、結局、都会側に附いた日本の詩人達と根元で異なる。

このようにランフェールには郷土を、いわば努力でもって発見することによってアイデンティティを獲得しようという涙ぐましい奮闘がある。「敵」はベルンでなくパリであり都会だったのだ。

似たことが、一八四七年に発足した〈ジュラ振興協会〉[72]という組織の活動についても言える。ちょうどロマン主義の興隆期に重なるこの文化活動は一種の地方主義の目覚めに支えられ〝ジュラ愛郷心〟が前面にでている。そうではあるが、それは〈外〉を排除する形でなく、むしろ世界に向かって市民権の名乗り上げをする形でのジュラの自己主張である。パリなどを射程に入れた外と通底することによって水質を同質化しようという理想主義に支えられている。例えば、その百数十年間の会報[73]に目を通してみても、文学で言えばジュラの文学者発掘や方言研究が主流を占める一方で、ヴィクトル・ユゴーを論ずることが先端的でもあるような雰囲気がある。またベルンにも、一八六二年には支部が発足しているという事実も指摘しておきたい。

リシャールのケースから、我々は愛郷というアイデンティティが必ずしも分離運動や民族自決などに転換しないことを確認した。運動というのは、従って、別の要因、つまりもうひとつの「発見」が働かなくてはならない。それはアイデンティティをいわば〝理由〟に掲げる、第二の郷土「発見」である。

以上、我々はジュラの何人かの詩人、作家の言説の中にジュラというアイデンティティがどのように形成され、どのように受肉化しているかを検証してみた。いずれもそれぞれの必然を持つ。しかし、それらは、事後的発見ではなかったのかという疑問がいつもつきまとう。また、民族自決の問題などで常に取り沙汰される（ジュラでも運動のレ

ベルでは前面に押し出されていた）言語や宗教がほとんど浮上しないことも意外な発見であった。

このようにアイデンティティが分離運動に至るには、たいへん大きな飛躍があるのではないかということを、我々は考えざるを得ない。そうするとこの飛躍に至るにはアイデンティティ以外の契機が必要だったのだ。たとえばこう言う種の民族運動は、権利とか公正さとかへの社会的不満足が、「民族」の名を借りて運動化し、そこで初めて「民族」が実体化し……という過程を経るのではないか。分離をすることがエスニシティの問題を消滅させるならば、分離運動後のヴォワザールも言っている通り[74]、実はその運動を支えたはずのエスニシティの大義自身も消滅するということである。愛郷のアイデンティティというのは示差的関係性でしかない以上は。

七　アイデンティティの円環――むすびに代えて――

我々は、アイデンティティがその深層からいかにして化成し疑似的実体の虚像となるかを見てきた。アイデンティティの対象は多義的な指向対象を持ちうる単なる〝モノ〟である。しかしそれはある契機をもって一義的意味化が開始されこの上もなくアンチームな〝コト〟と変容する。このコトがさらに第二の〝発見〟により、運動になる過程は上で見た通りである。

詩人の自己=郷土という非在のプレザンスも運動にとりこまれて初めて具体化するがそれはアイデンティティの根本的変質をも意味する。内面の自己目的化が起こるのである。共同体に支えられている言説が共同体を支える言説（スローガン）へ逆転するからである。

言語、宗教、地域、歴史、習俗文化などへのアイデンティティは文化として現に存在してしまっている。しかしそ

のアイデンティティを、ヘルダーのVolkstumのようにあたかも計測可能な実体であるかのように神聖視するのは妄想体系ではある。とくに、その倒錯が排除的、消去法的紐帯にまでいたると共同体保持的なアイデンティティは凶器と狂気に変身する（ローレーヌ地方出身のモーリス・バレスがLes Deracinés(1897)で唱えた〈血と大地〉をキー・コンセプトに据えた愛郷主義は結局mystico-nationalismeに変容しナチズムへの地下水脈となったことはよく知られている。同様、ハイデッガーのIn-der-Welt-Seinの内実としてのMitseinがナチズムの共犯者という最近の認識も、無視はできないだろう。言うまでもなく、ナチズムは民族アイデンティティと称する大義の最も〝純粋な〟発露だった。）

あるアイデンティティ故に分離するのでなく、分離するためにアイデンティティが要請されさらにそれは補強されるに至る。たとえば、ジュラ政府の『ジュラの歴史』[75]は彼らの歴史を述べるにあたって、ジュラ地方の氷河期におけるネアンデルタール人から始めているのがその例である。これはほほ笑ましいが、すでに〝真性〟アイデンティティに対するオプセッションが現れている。

この単なるジュラがある契機により差異化されたジュラに変成し、第二の契機で分離運動に至りそこからジュラは振り返られ事後的発見の対象になる。このように、アイデンティティは自己言及を永久回避しようとばかり螺旋的に円環しつつ高揚する。

その同じ道程が個人の中でもおこる。自己に同一化されたジュラを愛する、すなわち、自分で自己を愛し、その愛を高めるため、愛することを愛する……というナルシスムのスパイラル的上昇である。それは、詩人たちが「ボク」を見出すためにボクのことば（方言=アルゴ）に沈潜するありさまとパラレルな風景である。

この円環はベルンを切り離すことを目的としていた運動であったゆえに、その目的が成就された、その瞬間、崩壊

する。自己目的化していたアイデンティティは一切の抵抗感を喪失し、無重力状態に失墜した。示差的発見に始まるアイデンティティ追及の円環運動はその終極にアイデンティティの自爆的喪失を必然的にもうひとつの目的にしてしまうと言うパラドックスを抱え込む。

闘い済んでアイデンティティはジュラの澄明な空気にもどる。

郷土に対する外侮（と意識されるもの）が自己に対する侮蔑と感じられるのは、ジュラの詩人達が歌ったように、母に対する愚弄を許せない子の感情である。しかしこのアナロジーについて注意しなくてはならないのは第一に、宗教や言語や郷土に対する民族アイデンティティは擬制としての「血」でしかなく、すなわちフェチシズムであるということ、第二に、にもかかわらずこのフェチシズムがデモクラシーの延長線上で絶対化・特権化されていることである。

アイデンティティの違いを口実にした分離の大義はある種の失語症にも似て果てしなく個別化にむかう原理である。しかし共同幻想こそアイデンティティの土壌であり、母の子宮のように自分を包む外枠があって初めて成立する虚構であるとすれば、この分裂志向はいかなる点で折り合いをつけるのか。

そして、そもそも民族自決は集団主義なのか個別主義なのかの疑問をいだかせるのは、この運動がいつも国家を射程に入れているもう一つの国家主義だからである。分離運動を必然的に内包してしまう制度をめざす矛盾をどのように解消するかという不安を閑却した楽天主義でもある。〝文化的放散〟は必然的に惨禍の元凶となる摩擦を生み出す。また一方で、人の集団は純粋理念的にどこまで細分化しうるかという反省がそこに欠如している。

おおくの民族自決は「国家」を敵にまわしての運動だが、その行く末に国家がほどけてばらけて別の「民族」集団国家だけが残るとすれば、相互理解はこんがらかるし、軋轢もひどくなるだろう。いわば方言だけの言語世界。それ

らを結ぶもの分かりのよい相互尊重（「人類は皆兄弟」）などありえるのか。そもそも民族主義のアイデンティティは、エスノセントリズム、排外主義、オレの土地主義、夜郎事大、自民族卓越性、異族迫害などと背中合わせの否定的側面も持っていることも忘れてはなるまい。

異民族同士でアイデンティティを共有できるなどということはアイデンティティの形容矛盾である以上、相互摩擦は必然傾向である。一方、出発原理は大変違う場合があり得ても、民族集団はミニ国家としてまたその内部のサブ民族のアイデンティティとの軋轢を発生させる可能性を十分に持つ。したがって、アイデンティティに依拠する集団が有り続けるかぎり、すべての集団は加害者と被害者の可能性を持つ。とくに、より大きな問題は、被害者がその同じ原理であるアイデンティティを持ち出しては、じつは平等の原理に見えて、問題の本質的解決を永遠に先送りすることになるだろうことである。

ジュラ分離のように故国「物語」にどっぷり一度は漬かってみるのも悪くはないという意味で、ジュラ分離運動に共感を覚えつつも、我々はアイデンティティという大義から、不謹慎にも、一九世紀のあのゴビノー伯の、抱腹絶倒・荒唐無稽『人種不平等論』(Essai sur l'inégalité des races humaines) を思い出してしまう。

集団と集団の間のある軋轢を差別ということばでとらえるのか、不公平ととらえ法的、経済的、制度的な視点のみで解決を見ようとする合理主義に転化するのか、この両者は似ていて根本的に矢印の向きがちがう。民族を超える（モザイク模様になるのでなく真にメルティング・ポットに入る）と同時に国家を豆腐のようにやわらかく水っぽくしてしまうのは人の滅亡へのプレリュードとして許されない〈物語〉なのか。

ヒトはおそらくまだ宇宙にアイデンティティを求めるほどの背丈をしていない。とすると、この小さな〝世界〟に生き続けながら、しかも安定したアイデンティティは拒絶しつつ、浮遊し、多重的に〈他者〉をとっかえひっかえし

ているようなグズグズに分裂する〝我〟として（ハイデッカーにさからって）「堕落」をあえて選び取り「根無し草」に生きることを試みるか、それとも今しばらくロマン主義の物語に耽溺してみるかの選択を迫られていないだろうか。

補遺

『上』の注記（40）で「予定」として記した、ラウフェン地区の帰属についての住民投票が一九八九年一一月一三日行われた。分析、評価抜きでここに結果報告しておく。

投票の結果、ラウフェン地区はベルン州から分離を決定、バーゼル・ラント州に自主的合併。賛成四、六五二票、反対四、三四三票、投票率九三、六％。またこの結果、ヴェルラ村とエーデルスヴィラー村の帰属問題は宙に浮いてしまった。エーデルスヴィラー村がバーゼル帰属に難色を示しているため、同村が完全飛び地になりヴェルラ村との交換すら不可能になったからである。

注

（1）今回分析の対象にしなかったが、ジュラ問題ではかなり重要な役割をはたした著述家に次の二人がいる。次項のジャン・キュタの弟のトリスタン・ソリエ Tristan Solier。彼は分離運動では先頭に立った文学者の一人。アジョワ地方の生活感覚を詩、イラスト、演劇、音楽で表現をした。ジャン・P・モニエ Jean-Pierre Monnier。彼は一九二一年「南」のサンチミエ生まれの小説家、詩人、エッセイスト。やはりヌシャテルで高校教師をし、ヴォー州に住む。自分の著述は自分の血脈の中に生きている風土に根を張る樹木の枝であり葉である、と言い、分離運動は、この「血」というものを前面にだして論陣を張った。

（2）ジャン・キュッタ Jean Cuttat は一九一六年、ポラントリュイ生まれ。詩人。ベルン大学法学部出身。一九四二年か

ら四九年にかけてヴァルゼルやシャフテル Schaffter の三人で、ポラントリュイに "Editions des Portes de France"（フランスへの門）という出版社を興し、この地に文芸運動の種をまいた。その後一九四九年パリへ出たが、一九六六年に帰国。ジュラ運動に積極的に参加し、とくに問題の昂揚期（七〇〜七二年）に "Jura Libre"（自由ジュラ）というかなり戦闘的な雑誌を主幹する。現在はフランスに帰化しブルターニュのラ・デュルバルに住む。一九六七年〈ジュラ振興大賞〉を受賞。

(3) David Bevan : *Ecrivains d'Aujourd'hui - la littérature romande en vingt entretiens* -, 1986. p. 68-69.

(4) David Bevan : Op. cit. p. 68.

(5) アジョワ地方とフランスの類縁性は我々も述べてきたし、多くのスイス人も実感として持っている。cf. Gonzague de Reynold : *Cités et Pays suisses,* 1914-1920. p. 166.

(6) この出版社設立のいきさつについては Jean Cuttat et autres : *L'Edition à Porrentruy,* 1977. p. 7 sqq. に詳しい。

(7) 「ジュラはアレマニック〔ドイツ語圏スイス〕とは結び着かないが、さりとてロマンディ〔フランス語圏スイス〕とも親近性が薄く、むしろフランスと結び着く」という考え方はおなじジュラ出身の文芸評論家オギュスト・ヴィアットなどの年来の持論と軸を同じくする。Auguste Viatte : *"Jura et Culture française,* in *Jura-Ecriture-Identité.* 1981, p. 12-16.

(8) *Les Chansons du Mal au Coeur* (1942), in *Les Poèmes* de Jean Cuttat. 1989. p. 71.

(9) Jean Cuttat : *Noël d'Ajoie.* 1974. ただし、この詩は一九六〇年頃から断片的に書かれ、随時、集会などで朗読の形で発表されていた。

(10) Ibid., p. 11.

(11) Ibid., p. 59.

(12) キュタはヴァルゼル宛書簡でも次のような表明をしている。「ミヌー（病院の名）の窓はクルトゥドゥの平野とモン・テリブルの山並に面しています。ジュラの自由要求という想いがこの風景から、いま母が死につつあるこの病室

に立ち昇って来たのです。このときです、ぼくが骨の髄からぼくと故郷との繋がりを感じとったのは。それは母とぼくとを繋いでいたものと同じ強さでした。あえいでいる母とあえいでいる故郷がかさなって見えたのです」

P.-O. Walzer : *"Parler pour tous"* in *Noël d'Ajoie*, pp. 67-68.

(13) Ibid., p. 18.

(14) Ibid., p. 41.

(15) 「ピピ」Pipi は《文化闘争》時代のベルン体制派の司祭の名、Pipit に由来するが、フランス語では〈小便〉の意味。

(16) Ibid., p. 28.

(17) Ibid., p. 24.

(18) Ibid., p. 34.

(19) Ibid., p. 38.

(20) Ibid., p. 48.

(21) Ibid., p. 58.

(22) Ibid., p. 59.

(23) Ibid., p. 50.

(25) Ibid., p. 62.

(25) Simon Vatré : *Glossaire des Patois de l'Ajoie*. 1947. では〈tiai-tiai〉(「狂気の沙汰」) はあるが rai が不祥。一方、Doyen Bridel : *Glossaire du patois de la Suisse romande*, 1866. には rai (「手に負えない」) のみ掲載。

(26) Ibid., pp. 51, 52.

(27) アレクサンドル・ヴォワザール Alexandre Voisard は一九三〇年、ポラントリュイに生まれ、商業学校を卒業後、演劇を志し、のち郵便局員、会社員、本屋などをする。詩人として一九六〇年代に認められ、分離運動に参画。一九六七年、《自由ジュラ賞》受賞。現在ジュラ州文化局代表。フォントネ村に住む。

(28) David Bevan : Op. cit. pp. 200-201.

(29) Alexandre Voisard : *Liberté à L'aube,* 1967. 引用は、La Montagne humiliée (1968), Petite Marche de Nuit (1971), Au souvenir du Chaume (1971) を含むブヴェ版（一九八〇年）を使用。

(31) Ibid., p. 15.

(31) Ibid., pp. 15-34.

(32) 「ぼくには思える、今夜／星のかがやく空が大きく広がり／ぼくたちに近ずくように。そして夜が／そんなにもの光の向こうですこし明るくはなるように//そこで茂みがまた茂みの下でかがやき／緑色と、熟した果実のオレンジ色が濃くなる／天使のランプが近い。見えない炎の／まばたきが普遍の樹木となる」（Yves Bonnefoy ; *L'été de nuit,* in 《*Poèmes*》 p. 185.）このすぐれた詩人の、たまたま抜き出した二聯において、「夜」「星」「茂み」「樹木」はどれだけ集まっても常に・さらに普遍的世界（ボンヌフォワのいう《プレザンス》）を強固にするだけあって、郷土に結び付く地理的、風土的に個別な風景を決して想起させるものではない。だから果実は「オレンジ色」であり「天使」が登場し、「樹木」はたんなる樹木であるべきなのだ。

(33) ピエール・シャピュイ Pierre Chappuis は一九三〇年「南」のタヴァンヌ生まれ。現在はヌシャテルで教師をする傍ら詩作、評論をおこなっている。シャピュイはジュラ問題からかなり距離をおいて、外から静観していた。ただし、フランス語の問題にこだわり、分離運動は、言語問題を第一義にして闘うべきだったと批判している。

(34) Pierre Chappuis : 〈*Marche Nulle*〉 in *Petite Anthologie de la poésie jurassienne vivante.* p. 29. 1968.

(35) *Liberté à l'aube,* p. 15.

(36) Ibid., p. 37-38.

(37) 『草盗人』 *Les voleurs d'Herbe,* in Op. cit. pp. 75-78.

(38) Ibid., p. 75.

(39) Ibid., p. 75.

(40) 「フランスには神秘的なナショナリスムが生まれた。その最大の象徴はオルレアンの少女の姿である」クルツィウス『フラン文化論』（大野俊一訳）一九七六年、一六頁。

(41) Ibid., p. 45.

(42) Ibid., p. 76.

(43) ロジェ=ルイ・ジュノ Roger-Lous Junod は一九二三年、「南」のコルジェモン Corgémont に生まれる。ヌシャテル大学文学部卒業後、教師生活をするかたわら小説、文芸評論などの文筆活動をしている。一九六三年〈ジュラ振興協会文芸賞〉受賞。

(44) *Une Ombre Ebloussante*, L'Age d'Homme. 1968.

(45) Roger-L. Junod : op. cit. p. 93, p. 113, p. 156, p. 158, p. 185 etc.

(46) 〈*Le Verger*〉, 〈*Le Chateau*〉（*"Petites proses"*）in *Petite Anthologies de la poésie jurassienne vivante*. 1968.

(47) Ibid., p. 75.

(48) Ibid., p. 79.

(49) リュシアン・マルソー Lucien Marseaux。一八九六年、コルジェモンに生まれる。「作品」というのは *"Un Homme à travers le Monde"* cf. *Anthologie jurassienne*, pp. 211-225.

(50) *"Présence littéraire"* in *Jura-Ecriture-Identité*. 1981. p. 17.

(51) *"Entre Bienne et La Chaux-de-Fonds"* in *Le Jura-Sud*. 1977.

(52) Op. cit. p. 55.

(53) *Anthologie jurassienne*. 2 vols. 1964-65.

(54) ピエール=オリヴィエ・ヴァルゼル Pierre-Olivier Walzer は一九一五年、ボラントリュイ生まれで、ベルン大学仏文科教授。マラメル、ヴァレリ、ロートレアモンなど象徴派詩研究では世界的に知られる。またジュラ文化研究の著書も多い。創作はしないが、ジュラ文化を支える具体的な活動、たとえば出版社を興したり文化研究会を創設したり

することに奔走した。

(55) ユーグ・リシャール Hughes Richard は「南」のランボワン Lamboing 村出身。一九三四年生まれ。青年の頃から放浪し、一九五九年から一九六八年までパリに住む。現在はヌシャテル州の小さな村に住み、古書籍商を営む。詩人であり、またブレーズ・サンドラールの研究家でもある。

(56) *Ici*. 1975.

(57) *La Saison haute*. 1971.

(58) Op. cit. p. 11.

(59) *"Réflexions et confidences d'un Marginal"* p. 88. in *Le Jura-Sud*.

(60) Ibid., p. 88.

(61) Ibid., p. 89.

(62) Ibid., p. 93.

(63) *28 août 82, hommage à P.-O. Walzer*. p. 43. 1983.

(64) ヴィルジル・ローセル Virgile Rossel は一八五八年、「南」のトラムラン Tramelan に生まれ一九三三年ローザンヌに没す。連邦裁判所判事を務めるかたわら、故国への愛郷心あふれる膨大な著作を残した。

(65) Jeanne Fell-Doriot : *Cet étonnant Virgile Rossel*. 1988. p. 144.

(66) Ibid., p. 148.

(67) *Le romantisme et ses poètes dans la Suisse française* (1889), *Histoire littéraire de la Suisse romade des origines à nos jours* (1889-1891), *Histoire du Jura bernois* (1914), *Eugène Rambert, sa vie, son temps, son oeuvre* (1917) など。

(68) 彼のフランス語文学圏の拡大意図やスタール夫人（もスイス人であった）とおなじ独仏相互理解の精神などは、たとえば次のような著書からよくわかる。*Histoire de la littérature hors de France* (1894) *Histoire des relations litté-*

raires entre la France et l'Allemagne (1897).

(69) ヴェルネル・ラフェール Werner Renfer は一八九八年コルジェモン村に生まれ、村の中学を出るとチューリヒの工科学校へ入学したが途中でパリに出てジャーナリストを志し、挫折、帰国。ジュラの小さな町サンチミエの地方紙の編集をするかたわら創作に励む。三十八歳で死す。

(70) 〈*La tentation de l'aventure ou le vain travail de voir divers pays*〉(1928) in *Hannebarde et autres récits*, 1973. p. 112.

(71) Ibid., p. 129.

(72) 〈ジュラ振興協会〉Société jurassienne d'Emulation はポラントリュイで一八四七年二月に発足。発起人はストックマル。月刊の会報を（途絶えた時期もあるが）出し続けていた。

(73) *"Coup d'Oeil"* (1849-1856), *"Actes"* (1857-1875, 1879-1885-1959 etc.) *"L'Emulation jurassienne"* (1876-1877), *"Mémoires"* (1878) 等の異なったタイトルで出版された会報や小冊子、新聞形式の印刷物。

(74) David Bevan: Op. cit. p. 199.

(75) *Histoire du Jura* (Département de l'Education et des Affaires sociales de la République et Canton du Jura, 1986.

* *

文献（『上』で掲げたものを除く）

フロイド（井村恒郎訳）『自我論』一九六六年
フロイド（土井正徳訳）『文化論』一九五九年
エリク・H・エリクソン（小此木啓吾訳）『自我同一性』一九七三年
E・H・エリクソン（岩瀬庸理訳）『アイデンティティー青年と危機』一九七三年

E・ジェイコブソン（伊藤洸訳）『自己と対象世界』一九八一年
ジャン・ピアジェ他編（佐藤信夫他訳）『集団と個人』一九七二年
R・I・エヴァンズ（岡堂哲雄他訳）『アイデンティティの探究』一九七三年
ダヴ・ローネン（浦野起央他訳）『自決とはなにか』、一九八八年
N・グレーザー=D・P・モイニハン（内山秀夫訳）『民族のアイデンティティ』一九八四年
内山秀夫『民族の基層』一九八三年
G・オオイシ（染矢清一郎訳）『引き裂かれたアイデンティティ』一九八九年
P・トラッドギル（土田滋訳）『言語と社会』、一九七五年
C・ギアーツ（吉田禎吾他訳）『文化の解釈学』II一九八七年
ドゥニ・ド・ルージュモン（有田忠郎訳）『終焉なき回帰』一九七〇年
ルース・ベネディクト（志村義雄訳）『民族』一九五一年
エドウァルド・カルデリ（高屋定国他訳）『民族と国際関係の理論』一九八六年
ラウル・ブランシャール（滑川明彦訳）『フランス系カナダ』一九七八年
ラルフ・リントン（清水幾太郎他訳）『文化人類学入門』一九五三年
レックス（鶴木真、桜内篤子訳）『人種問題の社会学』、一九八七年
ヴェルナー・ケーギ（坂井直芳訳）『小国家の理念』、一九七九年
宇沢弘文他訳編『国家とは』（講座〈転換期における人間〉第五巻）一九八九年
河合雅雄『森林がサルを生んだ』一九八五年
丸谷才一『裏声で歌へ君が代』一九八二年
E・R・クルツィウス（大野俊一訳）『フランス文化論』一九七七年
佐々木一司、聴濤弘『社会主義と民族自決権』一九九〇年

寺田和夫『人種とは何か』一九六七年
新明正道『社会意識の問題』一九三三年
森田安一『スイス―歴史から現代へ』、一九八〇年
川田順造他編『民族とは何か』一九八八年
長部重康他『現代ケベック』一九八九年
田中克彦『言語の思想』一九七五年
『言語からみた民族と国家』一九八七年
『国家語をこえて』一九八九年
『ことばと国家』一九八一年
芳賀綏『言語・人間・社会』一九七九年
馬場伸也『カナダ』一九八九年
『アイデンティティの国際政治』一九八〇年
百瀬宏『小国』一九八八年
北方言語・文化研究会編『民族接触』一九八九年
矢田俊隆他『オーストリア・スイス現代史』一九八四年
李光一「エスニシティと現代社会」『思想』一九八五年四月号
和辻哲郎『風土』一九三五年
アルベール・ゲラール（中野好夫訳）『世界文学序説』一九六一年
小林秀雄〈故郷を失った文学〉小林秀雄全集第三巻一九六八年
《文化人類学》（エスニシティ考）二号　一九八五年
《ウリ生活》（民族差別への提言）三号　一九八八年

《三千里》（朝鮮の統一のために）二六号　一九八一年
《マージナル》三号　一九八九年
Gerard Chaliand : *Minority peoples in the age of Nation-States.* London, 1989.
Les Temps Modernes (Minorités nationales en France) Nos 324, 325, 326 Paris, 1973.
Michael Keating :*State and Regional Nationalism.* New York, 1988.
Divers auteurs : *L'Edition à Porrentruy. Porrentruy,* 1977.
Collectif : *Petite anthologie de la poésie jurassienne vivante.* Porrentruy, 1968.
Collectif : *Le Jura-Sud.* Moutier, 1977.
Collectif : *Jura, écriture-identité* 1981.
Serge Brindeau : *La poésie contemporaine de la langue française depuis 1945.* Paris, 1973.
Manfred Gsteiger : *La nouvelle littérature romande.* Vevey, 1978.
Jeanne Felle-Dorit : *Cet étonnant Virgile Rossel.* Delémont, 1988.
David Bevan : *Ecrivains d'Aujourd'hui - La littérature romande en vingt entretiens.* Lausanne, 1986.
Henri-Dominique Paratte *: Alexandre Voisard.* Fribourg, 1986.
Yvon Bourdet: 〈*Prolétariat universel et cultures nationales*〉 . *Revue française de Sociologie, vol xiii, no. 2,* 1972.
Denis de Rougemont : *Journal des deux mondes.* Lausanne, 1946.
Robert Lafont : *Autonomie de la région à l'autogestion.* Paris, 1976.
Gonzague de Reynold : *Destin du Jura.* Lausanne, 1968.
: *Cités et Pays suisses.* Lausanne, 1982.
: *Le Génie de Berne et l'Ame de Fribourg.* Lausanne, 1934.
Bundesamt für Landestopographie : *Landeskarte der Schweiz,* Blatt 1. Wabern, 1982.

Divers auteurs : *28 août 82, hommage à P.-O. Walzer.* Porrentruy, 1983.
Collectif : *Anthologie jurassienne.* 2 vols. Porrentruy, 1964-1965.
Jean Cuttat : *Les Poèmes de Jean Cuttat.* Porrentruy, 1989.
: *Noël d'Ajoie.* Porrentruy, 1974.
Alexandre Voisard : *La Claire voyante.* Vevey, 1981.
: *Liberté à l'aube, la montagne humiliée, Les voleurs d'herbe.* Vevey, 1967.
: *Toutes les vies vécues.* Lausanne, 1989.
: *Les Rescapés et autres poèmes.* Lausanne, 1984.
: *L'Année de treize lunes.* Lausanne, 1984.
: *Je ne sais pas si vous savez.* Vevey, 1975.
: *Le train peut en cacher un autre.* Vevey, 1979.
: *Louve.* Vevey, 1972.
Roger-Lous Junod : *Une Ombre éblouissante.* Lausanne, 1968.
Hughes Richard : *Ici.* Lausanne, 1975.
〈*Petite musique du temps de l'Avent*〉 . Gazzette de Lausanne, le 2 déc. 1989.
: *La Saison haute.* Lyon, 1971.
: *A toi seule je dis oui.* Lausanne, 1989.
: *C'est devenu ça ma vie.* Les Ponts-de-Martel, 1987.
: 〈*Premiers Neiges*〉 . Le Pays. 1982.
Virgile Rossel : *Histoire littéraire de la Suisse romande.* Neuchâtel, 1903.
: *Histoire de la littérature française hors de France.* Lausanne, 1895.

Werner Renfer : *Hannebarde et autres récits.* Lausanne, 1973.
Isabelle Kissling : 〈*Hannebarde*〉 in *Etudes de Lettres,* No 4. pp. 75-114., Université de Lausanne. 1982.
Paul André : *Visages spirituels de la Suisse.* Neuchâtel, 1968.
Edouard Martinet : *Portraits d'écrivains romands contemporains.* 2 vols. Neuchâtel, 1940 et 1954.
Schweiz-Schriftsteller der Gegenwart. Bern, 1978.
France Igly : *Poètes de Suisse romande.* Lausanne, 1964.
Schweizer Schrifttum der Gegenwart. Zürich, 1964.
Jürg Altwegg : *Leben und Schreiben im Welschland.* Zürich, 1983.
Charly Clerc : *Le Génie du lieu.* Neuchâtel, 1929.
Yves Bennefoy : *Poèmes.* Paris, 1978.
Jean-Claude Crevoisier, Roland Béguelin : *La Question jurassiennne en 1980,* Delémont, 1980.
Roland Béguelin, Roger Schaffter : *L'Autodisposition du peuple jurassien* Delémont, 1974.
Roland Béguelin : *L'Autodermination,* Delémont, 1967.
Alain Cherpilloz : *Le Jura irlandisé.* Vevey, 1976.
Roger Schaffter : *Vingt ans de lutte (1947-1967),* Delémont, 1967.
Ulrich Moser : *La démocratie alienée.* Delémont, 1983.

*　　*

この研究の一部は法政大学特別研究助成金の補助を受けてなされたものである。
Nous adressons particulièrement nos vifs remerciments à Madame Françoise Fornerod, à Monsieur Hughes Richard,

à Madame Marie-Claire Dewarrat et aux institutions suivantes: Service des Archives et de la Documentation de la République et Canton du Jura, Bibliothèque nationale suisse (Berne), Bibliothèque cantonale et universitaire (Lausanne), Bibliothèque cantonale et universitaire (Fribourg), Bibliothèque publique et universitaire (Neuchâtel), Bibliothèque publique et universitaire (Genève).　(*H. K.*)